

三島由紀夫の血盟に“参画、したカゲの重要人物五人！

事件後すでに二週間余、三島由紀夫の切腹事件は、さまざまな反応、ショックを与えている。事件の真相を糾明する裁判の弁護人も決まり、やがて全貌は世人の前に明らかにされるが、いまや覚悟の自決は、疑いようもない事実。その空前の血盟に“参画、したカゲの重要人物五人を追う。

(前後の人物省略)

決起誓い合った盟友・鶴田浩二の悔恨

事件が起きて各社の芸能担当記者は走った。めざすは東京・大泉の東映撮影所。相手は鶴田浩二。彼の日ごろの言動、民族とは、日本とは、国土とは……などなど。そのうえ、三島由紀夫は鶴田の大ファン。同世代でもある。互いに共鳴しあって意気投合の仲。というわけだ。

ヤクザ姿をマネルほどに熱狂して…

「あの事件に関してはノーコメントである。感想はない」押しかけた報道陣に、ニベもなかった、その日の鶴田浩二である。正月映画『博徒外人部隊』の撮影中に事件を知らされた。「最初は冗談だろうと聞いていましたが、現実には起こったと知って、控え室でたった一人テレビを見てましたが、終日黙りこくっていましたね。つぶやくように“なんであんなインテリが……ワカラン、”とっていた」と、撮影所の宣伝部員。

——三島の鶴田ファンについては、こんな話がある。瑤子夫人が目撃者だ。鶴田が得意とするヤクザ姿、マユを寄せてチョイと肩を落して立ち去るあの姿を、三島が家を出るときマネをしながら出ていったという。ジーパンにスポーツシャツ。真っ白なロココふう邸宅でヤクザを気どるとは、珍なる風景だがそれほど鶴田に熱狂していた。

鶴田も、三島の熱狂ぶりを知って、ひそかに喜んでいた。というのも三島が『映画芸術』誌上に『“総長賭博、と“飛車角と吉良常、の鶴田浩二』という原稿をもの¹していたからだ。そんなおり、ある雑誌から対談の企画が出た。二度断わったが「あの記事に対してすなおな気持ちでアイサツしたかったため」(鶴田)に對談は実現した。

だが、対談は、鶴田ファンの三島のペースで思わぬ方向へ。

鶴田 昭和維新ですね、今は。

三島 うん、昭和維新。いざというときは、オレはやるよ。

鶴田 三島さん、そのときは電話かけてくださいよ。軍刀もって、ぼくも駆つけるから。

三島 ワッハハハハハ、きみはやっぱり、オレの思ったとおりの男だったな。

〈三島由紀夫対談集「尚武のころ」〉

¹ 「に」が欠字

“決起、に動転して三週間

対談のあと鶴田は三島邸を夫人同伴でたずね、三島の差し出す色紙にサイン、三島は著書『文化防衛論』を贈った。ますます意気投合。しかし、それっきり二人は会う機会がないまま、十一月二十五日の事件である。むろん、三島は軍刀を持って駆けつけてくれ、などと電話したわけではない。それでも、関西の記者が「三島につづいて鶴田がなぐり込みをかけるのでは——」と、あわてて東京まで飛んでくるという一幕もあった。

それどころか鶴田は、三島の行動にすっかり動転して、撮影所の一室で考え込んでしまっていたのである。事件後、三週間、やっとしゃべる気になっただけ——。

「歴史に残る重大事件。芸能記事で少々の誤解を受けるのとは意味が違うし、命をかけてやった厳粛な事実、感想などといったものが出るわけがないと思って……。三島さんの行動が正しかったかどうかは別問題として、同世代に生きた人間だが、男のキズの受け止め方がこんなにも違うとわかりました」

同じ学徒出陣組でも鶴田は第十四期海軍飛行予備学生。三島は「医師の誤診で帰された」（兵役に耐えずという説もある）

「人間には分限というものがある。それを越えない範囲、自分をはみ出ない行動が、ぼくは好きだ」と鶴田。ということは、今回の事件、オトコの行動として割り切れないというニュアンスであろう。調子にのってうっかりしゃべった「軍刀もって」などトンデモない。

母校の関西大学をはじめ、全国の学生と思想問題について討論したり、講演したりする俳優・鶴田。「対談のときのわずかな時間でも、三島さんのいわんとすることは情動的に共通点があった」といいながらも、「三島さんの著書を三読、四読、五読もし、それでもかつ永久にわからないかもしれない」という。仁義に生きる世界を演ずる鶴田、映画でのサッソウぶりとは違って、スッパリとは割り切れぬ表情。イタズラに意気投合すまじ、の教訓でもあろうか。